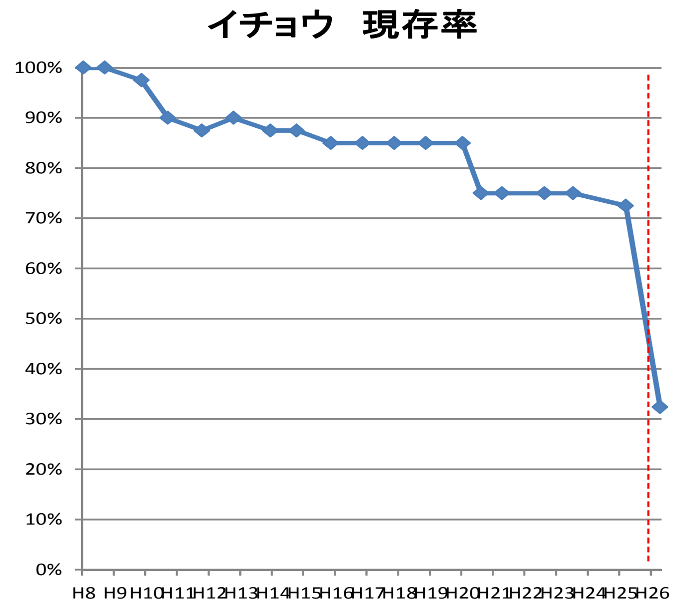
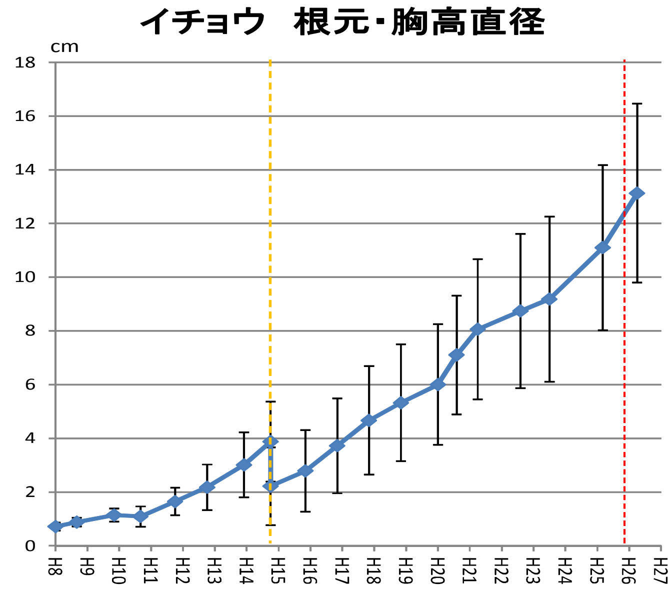
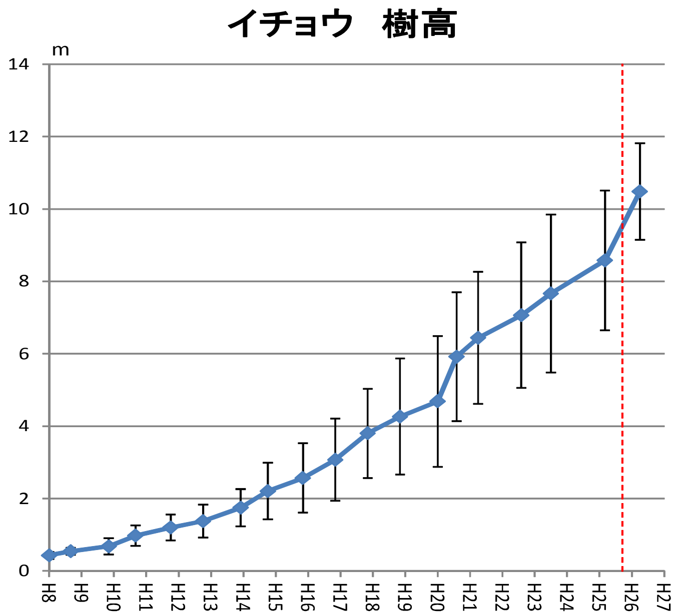
樹種名	イチョウ
科　目	イチョウ科
学　名	*Ginkgo biloba*
分　布	中国原産の落葉高木樹であり、人為的な移植等により、現在は世界中に分布し、年平均気温が 0~20 ℃の降水量 500~2000mm の地域に多く分布している。
樹木特性	陽樹であり、ジュラ紀からはほぼそのままの姿で生き残った「生きた化石」と考えられ、世界各地の中生代ジュラ紀の地層からは、現在のイチョウ同様のものや絶滅したイチョウの仲間の化石が発見されている。これらのことから、恐竜の絶滅後に衰退し、中国の一部にのみ残ったものと考えられている。
用　途	材は黄白色で軟らかく、質が均等で緻密。光沢があるので碁盤・将棋盤・器具・彫刻・まな板・家具材に利用。内種皮（ぎんなん）は食用。
植栽本数/面積 （植栽密度）	182 本／ 0.05ha （約 3,600 本／ ha）
特　徴	【樹　形】 針葉樹とされる場合もあるが、厳密には広葉樹にも針葉樹にも属さない。 樹高は 20~30m 程度まで成長し、葉は扇形で葉脈が付け根から先端まで伸びている。また、葉の中央部が浅く割れている。 雌雄異株であるため、雄株と雌株があり、実は雌株にのみになる。雌雄の区別は葉の形でできるという俗説があるが、植物学的には根拠がなく、雌雄の判別は生殖器官の観察によるしかない。
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後 2 年を経過した頃から枯死が発生したが、その後は順調に生育している。初期成長量は比較的小さかったが、植栽後 5 年目（下刈完了・樹高 2m 程度）から成長量が大幅に増加した。 病虫獣害も特に見られず、植栽から 18 年を経過した現在の平均樹高は 10m 程度まで順調に生育している。
被　害	特になし。



【現存率】
植栽から 2 年を経過した頃より、枯死が発生しているが、枯死の原因は特定できていない。
林内の照度調整を図るため、平成 20 年、22 年、25 年度に本数調整伐を実施した。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 32.4%であった。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



【根元・胸高直径】
順調に成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 13.13 ㎝であった。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。
※　オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。



【樹　高】
順調に成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は、10.49m であった。
※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

《プチ情報》
中国原産のイチョウは、漢名を「公孫樹」といい、裸子植物門イチョウ綱の中で唯一の現存している種であり、そのため生きた化石と呼ばれる。
アヒルの足のような形の葉は、秋には黄色く黄葉し、落葉する。 ごく稀だが、葉がラッパ状になったものや、葉に実がつくものがあり、それぞれ「ラッパイチョウ」、「お葉付きイチョウ」などと呼ばれる。また、大木では気根と呼ばれる枝から垂れ下がった円錐形の突起を生じる場合がある。この円錐状の突起は、「乳」と呼ばれ、「乳イチョウ」と呼ぶこともある。